

中部標準化懇話会 勉強会部会 議事録

開催日	2024年2月28日(水) 13:30~15:00
開催場所	日本規格協会 名古屋支部 セミナールーム +Zoom
テーマ及び講師	テーマ: JIS 規格を作成した企業の事例紹介 講演者: 田中 敏文氏(株)田中電気研究所 代表取締役
参加者	5名
作成者	勉強会部会/リーダー 蛭川 充 記
スケジュール	13:30~15:00 講義とディスカッション
報告記	(株)田中電機研究所 田中 敏文社長 ・ 昭和 24 年創業、昭和 38 年創立(60 周年) ・ 資本金 2500 万円 ・ 従業員 33 名 ・ 事業内容 ① OEM 事業:放射線測定器・プリント基板・電子機器 ② 自社製品事業:ダスト濃度計開発・製造・販売・メンテナンス

講義の概要:

ニッチな製品の標準化が世界展開のはじまり

1. ダスト濃度計とは:

固定発生源であるボイラー、燃焼設備から排出される排ガス中のばいじん(すす)を連続測定する計測器。

世界では連続排ガス監視システムにダスト濃度計が組み込まれているが、日本では、大気汚染防止法で月に1回 手分析(公定法)で届け出が必要。企業が独自に住民からの苦情対応で連続測定を実施している。

2. 標準化(JIS 化)のポイント

当初、測定器の JIS 化(製品規格)を検討していたが、計測器の性能を評価する規格がなく、信頼性向上のために性能評価の規格制定を実施した。

3. 標準化を進めるうえでの苦労した点、良かった点

- ・委員会には競合他社(国内、海外製品の代理店)、関連団体で構成。
- ・海外メーカー(ドイツ、イギリス)製の販売が多く、国内メーカー3社で業界団体は作れない。
- ・委員会をスタートしたが、製品規格の標準化を検討するも競合他社の意見があり方向性を変更し評価方法の標準化とした。
- ・JISには計測方式が異なる3種類(3社)の評価方法を記載した。記載に当たり企業名を載せた。
- ・JIS制定のファブリックコメントでは、同業他社が委員会メンバーになっている。委員会メンバーは意見が出せないなので、ここは意見が上がり通った。
- ・政府からデジタル化の方針が出され、自動測定に注目されてきている。

4. 質疑

① 海外規格との関係性について

国際規格で決められているのは実証データの取得方法であった。
実証データは、設備は燃料などにより変わるため比較が難しい。
JIS化にあたり、標準ダストを定義し、一律で評価できるようにした

② JIS取得後で販売にどう影響したか。

電力会社での検証期間が短くなった。
また、新規の顧客が増えた。シェアが100%になった。
海外での販売の影響はこれから先になる。

③ 海外認証は

TUVの認証も検討したが、ニッチ製品過ぎて評価する人がドイツに3人のみ。
期間と費用が掛かるので断念した。

④ 特許と標準化について

戦略: 製品規格原案を策定する中で、規格値を実現するために他社では大変でも当社では容易に達成できる構造を自社特許で押さえておく。

標準化制定の際に、規格値は決めるが、どうその値をクリアするかは自社ノウハウとした。

以上